

---

# 麻雀同好会・雀龍

わらびもち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻雀同好会・雀龍

### 【Nコード】

N6012C

### 【作者名】

わらびもち

### 【あらすじ】

受験期に麻雀にはまっあまみやたつきてしまい、志望校に行けず平凡な商業高校に入学することになった雨宮達樹。達樹はもう二度と麻雀をやらないと決意する。しかし、仮入部初日。麻雀同好会を見つけてしまう。そのまま麻雀同好会にはいつてしまい、いろいろなことをやらされる羽目に。男子1人に女子3人。このまま誰か1人と恋に落ちるかと考えていたが、そんなこともなくただ毎日麻雀に明け暮れる日々が続くはず。そんな、主人公のちよっぴりパシられる麻雀活劇です。

## 第壱話 麻雀同好会へ

親に聞くと大抵の人はこう言うだろう。

「高校生活はとても早く感じたな」

聞いても分かるとおり、高校生活は人生の中でもとても重要といふことが。

しかし、この重要な高校生活は大半が中3での生活で決まってしまう。

無論、俺は中3の生活をものの見事に棒に振るってやった。受験期真っ只中に麻雀にはまってしまい、志望校に受からず、仕方なく後期受験でごく平凡な商業高校に入ることにした。

まあ、こんなこともあつて麻雀はもう二度とやらないと決意した。しかし、こんな決意もたやすく破ってしまうのが現実だ。

学校が始まってから3日後。仮入部期間にある部活（同好会かな）を見つけた。しかしこの同好会にも驚いたものだ。高校にあつていいのか？と思いたくなるような同好会だしな。しかし、これに惹かれるものはある。入るか否か。もう二度とやらないと誓ったものの、言葉を聴くと無性にやりたくなる。

そう、ここの同好会の名前は『麻雀同好会・雀龍』じゃんりゅう

シンプルながらも、そそられる名前だ。

ガラガラと、ドアを開けた。ちょうど女子3人で3人打ちをしているところだった。

女子たちの視線が俺へ向けられる。それは好意を持つ視線では談

じてない。殺意をこめたものだろう。

まずいところに入っちまったな。上級生か？いや違う。同級生だ。ん？まてよ。同好会なんて作れたっけ？ましてや1年がだぞ。もう1度女子たちを見てみる。あれ、どこかで見たような見てないような……1人は知っていそうで残りの2人は知らないような……ああもう、思い出せない。

「あら、あんたうちのクラスの奴じゃない？」

知ってそう人が話しかけてきた。そうだ。知ってるも何も隣じゃないか。女子がクラスの3分の2以上を占めている中、幸か不幸か数少ない男子と隣の奴。それがこいつか。名前は……うーん、何つつたっけ？うーん。

「あんた、隣のくせにあたしの名前覚えてないって言うの？頭どうかしてない？」

あいにく様だ。まだ俺の頭は正常だぞ。それよりこっちは必死で思い出してるんだぞ。少しは感謝しろっつーんだよ。ああくそ、うーん。ああ、思い出した。

たちはなあやめ  
「橘菖蒲だろ、お前」

「で、何の用？」

出来るだけ早く片付けたい様だな。若干俺を無視して再開してるし。

「あのお、ひとついいかな？」

「だから何？」

半ば怒ったように言う。隣の席で見た感じでは、ただの美人にしか見えないのだが、本性はものすごく腹黒い。人は見かけによらずとはこのことか。

「あおさ、打ってもいい？」

さつき俺がここに入ってきたときと同じ視線が返された。同じく、殺意をこめた視線。

タブーか？まずいことを言ってしまった様な気がしてしょうがない。帰りたいけどいけない。ヤンキーに囲まれた気分だろう。実際ヤンキーに囲まれたこと無いからあくまでも想像だが。

数十秒たつて知らない女子が、

「なにつつ立ってんの？早く座りなさいよ。打つんでしょ？」

意外な反応に戸惑いつつもひとつ空いているいすに座る。東席、とんちや親か。

初めて自らの手で、マージャンが打てる喜びをかみしめながら、女子3人を見てみることにした。

対面たいめんクラスメイトで隣の席にいる橘菖蒲。クラスで隣にいる以上は美人にしか見えない。ロングヘアーで髪留めはしていない。好みのタイプだ。たとえるなら、4、5年前の宇多田ヒカルかな。しかし、恋人にするにはやな趣味を持っているものだ。案外腹黒い面を持つているようだし。

上家かみちやにいるのは知らない美少女。美女というには若干幼いように見えるが、実は同学年だったりしたりもする。セミロングで若干カールしている。ロリコン好きにはたまらないだろう。顔、身長から見て不釣り合いなほど胸がある。悪くないかな。

下家しもちやにいるのも知らない美女。こっちは2人から見るとかなり大人びている。ショートカットでいかにも厳格そうな人かな。意外とツンデレキャラだったりもしそうか。胸も結構ある。これで性格もよかったらパーフェクト。

配牌しながら、

「お二方のお名前は？」

「ちよ、あんた。何であたし以外には丁寧語なのよ！」

「いいじゃん、いいじゃん。私はね、三上みかみゆつき癒月だよ、よろしくう」  
見た感じそのままのような声だな。天使のような人だ。名前から

して癒してくれそう。しかーし、この人も同級生。考えられないくらいかわい。少女として。

「伊達美雪だ。だてみゆき今後ともよろしく。ところでアナタは？」

「ああ、俺は雨宮達樹あまみやたつき」

伊達さんも見た感じそのままだな。名前も声も。

美人に囲まれて麻雀をやるのもおつな物だな。今後ともよろしくか。これはもしや、永久お友達宣言か？それは残念だぞ。どっちかでもいいから今後お友達以上の関係になってみたいものだ。

ん？今後……ちょっと待てよ。それってもしかすると、この先もここに来いよってことか？

「あら、ただで打ってるのにもう来ないつもり？そう、もちろん負けたら何でも言う事きくのよ」

くそ、いちいちうざったい女だな、橘菖蒲は。そんなんだったら一生彼氏できないぞ。

「あら失礼ね。告られたことぐらい何回だってあるわよ」

「そう、菖蒲っちはただ付き合わないだけだよ。気を付けたほうがいいぞー」

「もう癒月い。言わないでよ」

「さて、何でも言うこと聞くなら結構迷うな」

くつ、やはりこの方。冷静に消えかけていた事をついてくる。強敵だぞ。

「金がらみ以外ならなんだってやってやるよ」

「おお、言っただけくん。それじゃあ……好きな人を激白するのはどう？」

どうもこうもない。金意外なら何でもいいとは言ったが、きついぞそれは。

「なら私は……次負けたら何でも言うことをきくつての  
で」

どういうことだ？別にそれならいいけど。

つか待てよ。何で俺が負けるって設定になってんだよ。

「だって麻雀歴いくつだよ」

麻雀歴、麻雀歴……ざっと一ヶ月くらいだろう。受験の時にはもう親に止められていたしな。しかも、やっとオンライン麻雀で7級取得したばかりで、俗に言う初心者？たぶんこいつら手馴れているだろうし……勝てるか、ほんとに。

「菖蒲はどうするんだ。馬の骨の罰を」

う、馬の骨？見かけによるがやはりこの方も黒いな。

「うーん、そうね。じゃあ週末にみんなにおごるってのは？」

おい、ちよつと待て。金がらみだぞ。

「それいいね。よろしく頼んだよ、達くん」

いや、よろしく頼んだよじゃないよ。

「そうだな。私はスタバでいいぞ」

でいいぞか、おまえ。少しは人の話し聞けって。

「じゃ、それで決まりね。ほら始めよ。あんたからでしょ」

はあ。ため息しか出ない。勝つ気もしないし、負けるたら最悪だし。来るんじゃないかったよ。

はあ、しょうがない。やってやるか。

ドラは壹萬イマンだから、二萬リマンか。手牌もそこまで悪くはない。

さて、何を捨てようかな。

## 第壱話 麻雀同好会へ（後書き）

本小説に興味をもって呼んでくれた方、ありがとうございます。  
自分自身も主人公と同じく、麻雀初心者なので間違っていることがあるとは思いますが。そのときは教えてもらえたら幸いです。

自分もこの小説を書いていつて麻雀スキルをアップさせようと思っています。

なお、本小説はあまり役に立たないと思いますので、ご了承ください。  
また、次話でお会いできたら光栄です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6012c/>

---

麻雀同好会・雀龍

2010年10月8日22時00分発行